

〈論文〉

戦時講話『死ぬということ』 ——第一次世界大戦時の A.E. ホッヘの死生観——

松下 正明

はじめに

2020 年の死生学研究所の連続講座として、本タイトルで講演を行った。2019 年の日本精神医学史学会での講演（松下 2019）を基底にしたものだが、2019 年の講演が死生学研究所の山田和夫所長の目に留まり、死生学に密接に関連する話題であるという理由で、今回の連続講座に指名された次第である。精神医学史学会での講演は学会機関誌『精神医学史研究』で論文化（松下 2020）しているので、本稿はそれらの講演や論文と重複するところが多いが、ここではできるだけ死生学の問題として論じてみたい。

A.E. ホッヘ（Alfred Erich Hoche）は、20 世紀前半における司法精神医学の専門家として、ドイツ精神医学界の重鎮であった E. クレペリンの疾患単位論を否定して症状群学説を提唱した者として、S. フロイトへの厳しい批判者として、長年にわたってのフライブルク大学精神科教授として、第一次世界大戦後のヴァイマル体制時の 1920 年、法学者の R.A. ビンディングとの共著で、著書『生きるに値しない生命の抹殺を認める』（以下、「生きるに値しない生命の抹殺論」）を刊行し、1930 年代のドイツ第三帝国におけるヒトラーの精神障害者の安楽死政策の理論的根拠を提起した者として、精神医学史上よく知られた人物である。

そのホッヘが、1918 年 11 月 6 日、第一次世界大戦の終戦直前に、フライブルク大学内で、「死ぬということ」という市民向けの戦時講話を行ったが、その講話、つまり、ホッヘの死生観が、精神障害者を生きるに値しない生命とみなし、その抹殺的安楽死を勧めた「生きるに値しない生命の抹殺論」に先駆する思想として位置づけられるという仮説を述べるのが本稿の目的である。

1. ホッヘの略伝 (Degkwitz 1987 ; Seidel 1999 ; 松下 2020)

ホッヘの簡単な略歴を紹介しておく。

ホッヘは、1865 年 8 月 1 日、ドイツ、ザクセン州のヴァイルデンハイムで生育した。父親は牧師であった。ベルリン大学、ハイデルベルク大学で医学を学び、1888 年に卒業、ハイデルベルク大学の小児科助手となった。1890 年、同大学精神科の C. フェルストナー (1848-1905) 教授から誘われて、精神科の助手となった。1891 年、フェルストナーは、ストラスブルク大学教授に転任することになり、ホッヘもそれに伴って、医長として同大学に赴任することになった。同年、精神医学の教授資格をとり、私講師となり、8 年後の 1899 年、員外教授に任命された。

1902 年 10 月 1 日、フライブルク大学精神科の正教授に任命された。ホッヘ 37 歳のときである。爾来、1933 年 9 月 30 日、68 歳で、退任するまで、31 年間にわたってフライブルク大学教授の職を続けた。この間、1914 年 7 月、第一次世界大戦が勃発し、1915 年、戦争で子息を失った。1918 年 11 月、ドイツ帝国の敗戦によって大戦は終末を迎えるが、その間、ホッヘは、銃後にあって、大学教授として、市民への戦時体制を支えることになる。また、1917～18 年、ドイツ祖国党のバーデン地区の責任者になった。

戦後のヴァイマル体制時代のホッヘは、1920 年、ビンディングとの共著で上記した著書「生きるに値しない生命の抹殺論」を刊行するが、その後、専門分野では、司法精神医学関連論考が比較的多く公刊された。しかし、学問的にはとくに目ぼしい業績はなく、1920 年代は、政治的活動については不詳だが、それまでの大学教授としての仕事を淡々と続けることに終始した。

また、ホッヘは、精神科医としての活動以外に、詩人や小説家として文学活動を行っていたが、その活動は 1920 年代に目立ったようである。彼のペンネームは、アルフレート・エリック。詩集・小説としては、『ドイツの夜』(1921)、『馬鹿げた遊び、新ドイツからの光景』(1921)、『無神論者の死』(1923) がある。

ヒトラーが政権を奪取した 1933 年、妻がユダヤ人であるという理由もあって、ホッヘは、自ら大学教授を辞することになった。その後、バーデン・バーデンで余生を送っており、その間、自伝『年輪』を著している。

1943年5月16日、逝去。享年77であった。

2. フライブルク大学時代のホッヘ

フライブルクは、ドイツ南西部の、ライン川上流に位置するバーデン地域にある旧都である。また、フライブルク大学は、1457年に創立されたドイツでも伝統ある名門大学で、人文・社会・自然科学の分野で数多くの著名な人物を輩出している。ちなみに、ホッヘが在籍した1902～1933年の時期、大学教授の同僚には、哲学者のH.J. リッケルト（在籍1896～1915）、E.G.A. フッサール（在籍1916～1928）、歴史家のF. マイネッケ（在籍1906～1919）がいた（Seidler, 1991）。

30～40代のホッヘは、かなり積極的、活動的な学者であった。フライブルク大学に赴任してからすぐに、学内でも頭角を現わした。1905～06年、医学部長に選ばれ、1910～11年には学長に就任、1913～14年、再び、医学部長に任じられている（Seidler 1991）。

フライブルク大学医学部の精神科は、1884年に設置された。初代の教授はH. エミングハウス（1845–1904）（在籍1886～1902）、第2代がホッヘ（在籍1902～1933）であった（Degkwitz 1987 ; Seidler 1991）。

筆者は、ホッヘの精神科医時代を、以下の4つの時期に分ける。

1) 1890年から1902年までのストラスブルク時代、彼の学問的関心は、神経解剖学、神経病理学、精神生理学、司法精神医学であり、とりわけ、司法精神医学領域では、彼の編集で、『司法精神医学ハンドブック』が刊行された。『ハンドブック』は、1901年に初版、1909年に第2版、1934年に第3版が刊行され、当時の司法精神医学の標準的な教科書として評価が高かった。とくに、第3版は、当時のドイツ司法精神医学の主要なメンバーが執筆陣に加わり、ホッヘの『ハンドブック』として、洛陽の紙価を高めた。日本では、その一部である「刑法、刑事訴訟法」の項が荻野了によって全訳され、精神神経学雑誌に10回に分けられて掲載されるほどであった（1937～1938年）。2) 1902～1913年、フライブルク大学教授赴任から第一次世界大戦の勃発までの時期、3) 1914～1918年、第一次世界大戦の時期、後述するように、愛国者としての側面が明らかになった時期でもある、4) 1919～1933年、世界大戦の終焉後、ヴァイマル体制期からヒトラーが政権

を奪取するまでの時期で、この間は、精神医学の面ではほとんど業績をあげることにはなかった。

とくに第2期は、精神医学一般、臨床精神医学、精神病理学などと一括できるような精神医学固有のテーマを論じ、精神医学における臨床・研究においてもっとも充実し、ドイツ精神医学界ではトップランナーとして認知されるようになった時期である。この時期での代表的な論考は、1912年に公開された「精神医学における症状群の意義について」、およびそれに先駆した1906年のドイツ精神医学医学会での、クレペリンの疾患単位論を批判・否定した講演である（松下 2017）。

3. 第一次世界大戦時代のフライブルク

1914年6月28日、オーストリア＝ハンガリー帝国の帝位継承者フランツ・フェルディナント大公夫妻がサラエボで暗殺されたサラエボ事件が発生、7月危機を経て、同年7月28日、オーストリア＝ハンガリー帝国がセルビアに宣戦布告して、いわゆる第一次世界大戦が始まった。ドイツ、オーストリア＝ハンガリーに、最終的にはオスマン、ブルガリアが加わった中央同盟国とフランス、イギリス、ロシアに、ベルギー、日本、イタリア、アメリカ合衆国などが加わった連合国との争いで、当初、1914年のクリスマスまでには終結するとの予想に反し、両者の闘いは、種々の戦役を経て膠着状態に陥り、西部戦線では、中央同盟国と連合国がそれぞれ塹壕を掘って対峙するという状況が続いた。

第一次世界大戦中、ドイツ南西部にあるフライブルクは、西部戦線といわれるフランス・ベルギーからフランス東部までの長い塹壕の東端近くに位置している。西部戦線に近いということで、フライブルクでは戦争による直接的被害は大きかった。

1914年だけでも、フライブルク人口の4%にあたる3,388人が死亡した。ドイツ各地での平均よりも有意に高い数値であった（Chickering 2007）。1914年から1918年の間、フライブルク市の人口死亡率は増加し、死は、市内の至るところで体験された。市内の全世帯の6%で戦死者を抱え、家族の誰かに死亡者がみられていた（Chickering 2007）。

さらに、戦争による兵士や一般市民への被害に加えて、1918年春、アメ

リカに発生した、いわゆるスペイン風邪が、1918 年秋には、ヨーロッパ全体に急速に拡大・蔓延してきた（速水 2006）。フライブルクもそれに巻き込まれ、多数の市民がインフルエンザによって斃れていった（Chickering 2007）。戦争死より、インフルエンザ死の方が数としては多かったといわれる。

しかし、スペイン風邪の流行・蔓延は、兵士や一般市民に知られると士気に関わるとされ、中央同盟国や連合国ともに、各国では秘密にされていたとされる（速水 2006）。

このような時期、ホッヘは、大学での要職に就いていたこともあって、フライブルクでの名士として市民の間によく知られるようになり、市民を対象とした市民講座や講演会等に積極的に参加するようになった（Chickering 2007）。そのような銃後の社会にあって、戦争への勝利を願い、戦争継続への意志を強く表明し、いわゆる愛国者としてのホッヘが形成されてくる。

4. ドイツ祖国党

1917 年 7 月 19 日、ドイツ帝国議会で、多数派（社会民主党が主体）によって、戦争和解の講和を求める「平和決議」が採決された。当時の、戦線の膠着状態、兵士や民間にみられる厭戦ムードなどの影響があった。

一方、ドイツ帝国議会での平和決議には、全国的にも反対運動が発生し、1917 年 9 月 2 日、東プロイセンのケーニヒスベルクで、ドイツの全面的勝利、反帝国議会を目的として、ドイツ主戦派による大衆組織「ドイツ祖国党」が結成された（山田 1986）。創設の中心となったのは、後のカップの一揆で知られた W. カップであった。この組織は、軍部、政府、保守党、経済界、国粋派団体から支援を受け、1918 年夏には、ドイツ全国で 200 万以上の黨員、2,500 以上の地方支部を擁するにいたった（山田 1986）。

そして、フライブルクでも支部が形成され、その支部長にはホッヘが任じられた。フライブルクでは、ホッヘは、保守派、愛国者として、帝国議会における平和決議に対する熱烈な反対者として、よく知られていく（Chickering 2007）。

なお、この大衆組織は、1918 年 11 月のドイツの敗戦とともに、解散されたが、類似の大衆組織が戦後のヴァイマル体制下でも創設され、後のヒト

ラー出現のきっかけとなっていく。フライブルク大学で、ホッヘの同僚でもあったドイツの著名な歴史家F. マイネッケは、その著のなかで、「ドイツ祖国党は、ヒトラー出現のための完全な前段階であった」と述べている（マイネッケ 1974）。

5. 戦時講話『死ぬということ』

1918 年、第一次世界大戦は、膠着していた西部戦線が動き出し、両軍の激しい戦闘に米軍が加わったこともあり、戦線は連合軍が優位に立ち、ドイツ軍は戦線から後退するようになる。中央同盟国側の劣勢とともに、国内の中に厭戦気分が横溢するようになり、ドイツでは革命が生じた。1918 年 11 月 4 日に、オーストリア＝ハンガリーが連合国と停戦協定を結び、同年 11 月 10 日、ドイツ帝国のヴィルヘルム 2 世がオランダに亡命、11 月 11 日、ドイツも連合国と休戦協定を締結することになった。1918 年 11 月 11 日をもって、ドイツは敗戦、第一次世界大戦の終結とされる。4 年 3 か月余りの戦争であった。ちなみに、第一次世界大戦では、中央同盟国、連合国合わせて、軍・一般人の戦死者や行方不明者は 2 千万人以上、戦傷者を含めると 4 千万人以上の人に損害が生じたといわれる（Berghahn 2009）。

さらに、上述したスペイン風邪の蔓延による死亡者は、大戦における死亡者の数倍に及ぶと推定されるほど（速水 2006）、深刻な影響をヨーロッパ諸国に及ぼすことになった。

戦争とインフルエンザ流行によって、フライブルクでも、死者の数は激増してきた。死ぬことは、今や、日常生活ではありふれた現象となってきたのである。墓地は死者で溢れ、死を悼んで、市内のあちこちで泣き叫ぶ声を聞くことも普通の光景となった（Chickering 2007）。

そのような状況のもと、ホッヘは、ドイツの敗戦となる日の 5 日前の 1918 年 11 月 6 日、フライブルク大学で、市民向けの戦時講話を行った。タイトルは、『死ぬということ』（Hoche 1919）であった。

講話は、「死が世界を支配している。戦地では、死は、若者や成人を殺め、銃後の社会では、悪疫の衣を装って、すべての家々の門戸を叩き、女性や子どもたちの命を奪っていく」という文言から始まる。なお、疫病というのは

おそらく当時流行していたが、一般市民には秘密にされていたスペイン風邪のことであるが、冒頭の文言で、悪疫の衣を装ってと婉曲に述べるだけで、講話のなかではスペイン風邪の流行を語ることはまったくなかった。

ホッヘの講話は、のちに講話録（Hoche 1919）として 30 ページほどの薄い印刷物として公刊されるが、その講話録は、内容によって、章・項分けがなされるということではなく、最初から最後までの一続きの文章という構成をとっている。しかし、ここでは、分かりやすく、筆者がホッヘの講話の内容に沿って便宜的に項目分けをし、その項目に従って、以下講話を紹介することにします。

1) 講話の目的は。

講話は、死と死ぬことを自然科学の対象として語ることを目的とするとし、まず、死の科学的定義をする。そこで、死と生を絶対的に対比するものとみなすことは誤りであることを強調する。身体の組織を考えると、身体の一部が死につくあるときに、一方では回復、新生する組織もある。絶えず進行している死ぬことと一方で新生することとの両方をもった身体によって人間性の全体が創られていく。つまり、死の科学的定義として、死と生を絶対的な対比として捉えることを否定するのであった。

2) 人はどのようにして死ぬのであろうか。

戦争で身体がばらばらになって死ぬこともあれば、脳の一部の延髄の傷害で呼吸や心臓が止まることもある。結局のところ、死ぬことの過程によって、心臓と呼吸が決定的である。意識はまったく必要ではない。有機体全体が同時に死ぬわけではない。身体のある部分は心臓より先に死ぬこともある。しかし、「死ぬ瞬間」とされる時間は、心臓の停止と同じとするということにされている。

3) 死に際して、人は何を経験するのだろうか。

死に際して、意識はまったく明瞭であるというのは間違いである。死に際して、意識や痛みがなくなるのが普通であるし、死に際しての顔貌を素人なりに解釈するのも間違いである。実際の死では、痛みも意識もない神経の急激な切断は一般に痛みを伴わない。溺れ、首つり、墜落から助かった人の報

告でも、苦しみは何もなかったという。また、死の際、昔の生活が思い出されると言われているが、空襲で死にかけた人の経験ではそんなことはなかったという。生々しい情動、怒り、不安、興奮、身体的痛みは意識には上つてこないという現象はよく知られており、戦争での経験でもそうである。

「死との闘い」を経て死に至ると通俗的にはいわれているが、それも否定的である。

4) 人は、死ぬことをどのように理解しているのだろうか。

人は、生の苦しみを乗り越えて、死の安らぎの世界に行くことを望んでいる。

死が、居心地の良い時間を過ごすという確信した目標として理解されているのかどうか、あるいは、擦り剥けた肩から長期間着けていた軛を外す目標として理解されているのかどうか。よりよき生への移行が迫っているという内的確信をもつ者たちこそがもっとも穏やかに死ぬことになる。

戦地で、多くの戦士たちの死への準備は何に依っているのかという問いは私たちにも関心が深いが、多くの戦士たちは、上述したような死の理解で、生への執着を捨て、死への準備をしていると思われる。

5) 人は、死に際して、何を怖れているのだろうか。

身体的痛みでもないし、死が未経験であるという理由でもない。怖れることに関して、2つの不安がある。1つは、生の終わりは、自我の完全な否定であり、「魅力ある生、現存在の美しい習慣」を放棄することであるから、そのことへの不安であり、2つは、死後の世界で生じることへの不安、個人の生が死後の世界でも連続しているかどうかという不安である。

死後の世界については、原始時代から、様々な見方、考え方があった。古代人の埋葬物をみると分かるように、個人の生が死後の世界でも続いているという考えである。人の個人性が死後の世界に続いていることの人間の表象の種類は多い。

煉獄、天国、古代ゲルマン人の戦死者の霊が住むという宮殿。これらの場所は、生への意欲、死への不安において、自己を否定したくないことへの表現形態であつたともいえる。

このように、これらの不安が解消されれば、死を恐れることはないという

のがホッヘの講話での中心的テーマであった。

6) 何故、人は自らの自由意志で死を選ぶのだろうか。

最後に、ホッヘは、自殺のことに触れる。とくに、冷静で思慮深い人が、是非の判断を熟慮の上で、自由意志による死を選ぶことがある。そのような自死の形態を清算自殺とホッヘは称するが、その理由として、繊細な精神にとって、世界の卑劣な人間、嘘や中傷・誹謗の増加に対して、また理性的な世界秩序への信頼が動かされることに対して、その重圧に耐えられないのだろうが、しかし、たとえそうであっても自殺は絶対に避けなければならない。

ホッヘは、以上のことを述べたうえで、以下のように結語する。現在、死の意味を理解することは、生の意味を理解すると同様、空しい努力に終わっている。しかし、死に際して大事なことは、死の意味を理解することである。若者たちが戦地で死ぬことを嘆いてはならない。たとえ生の期間が短くても、正しく生きてきた生はそれ自体価値を有していると思うことが死を理解することでもある。

ホッヘの講話を簡単に要約したが、彼の主張は、戦時中のドイツにあって、戦地にいる、あるいは戦地に向かう若者たちの「死と死ぬこと」の意義を、一般市民に語ることであり、とくに、これまでの短い生を正しく生きていれば（明白に記述しているわけではないが、ホッヘの講話全体の印象からいえば、ホッヘにとって、正しく生きることは、戦争でドイツの勝利のために戦うことを意味しているように思われる）、若くして死ぬことを怖れる必要はない、死には意味があり、それを理解することが大事であると訴えることであった。

ホッヘの講話の背景には、大戦での徹底抗戦、反平和決議という、ドイツ祖国党の幹部としての、あるいは、20世紀初めから1918年までの時期、ヨーロッパで全盛期を迎える保守的愛国者、ナショナリストとしての思想があり、それに基づく戦時講話であった。少なくとも、精神科医としての戦時講話『死ぬということ』ではなかった。Chickeringは、その著（Chickering 2007）のなかで、ホッヘの講話は、愛国者による政治的遺言のように思わ

れると記している。筆者に言わせれば、自らの死生観という形をとりながら、愛国者による、「政治的戦意昂揚」を促した講話のように思われる。

6. 『生きるに値しない生命の抹殺論』(Binding and Hoche 1920)

第一次世界大戦後、ドイツはいわゆるヴァイマル共和国となるが、敗戦国ドイツに課せられた莫大な賠償金、急激なインフレ、国家財政危機、失業者の激増、反ボルシェビズムや反ユダヤ主義の拡がり、政党間の権力闘争、革命勢力と反革命勢力との激しい闘い、政治不信など様々な社会不安が生じてくる。

その流れの中で、ナチス党の創設と発展、ヒトラーの台頭、第三帝国の成立が促されてくるが、そのヴァイマル体制が確立し始めた 1920 年、法学者ビンディング（刊行時、すでに故人であった）と精神科医ホッヘの共著で、『生きるに値しない生命の抹殺論 その基準と型式』(Binding and Hoche 1920；森下／佐野 2001) が刊行された。

後に、第三帝国、ヒトラーの指示のもとで精神障害者等の安楽死（虐殺）政策が施行されるが、この著作はその理論的根拠として、利用されることになり、20 世紀の精神医学の歴史上、汚辱に満ちた著書として位置づけられている。その内容は、森下らの邦訳と解説（森下／佐野 2001）などによって、遍く知られているし、筆者もこの著作に関して詳しい解説を行った（松下 2020；松下 2012）。ここでは、その要点のみを記す。

本書は 2 部構成で、第 1 部は、ビンディングによって記載された「法学者による解説」、第 2 部は、ホッヘによって記述された「医師による見解」である。

ビンディングによると、法的に殺害（安楽死）が許される対象には、3 つのグループに分けられる。

- 第 1 は、重篤な疾病で、治療不能で、助かる見込みがなく、自分の状況を完全に理解したうえで、その状態からの救済としての死を望む者、
- 第 2 は、治療不可能な知的障害者で、生存意思も希死意識もない者、
- 第 3 は、精神面ではなんら問題はないが、瀕死の重傷で意識を失った者である。

ビンディングは言う。ある人の死が、当人にとっては救済であり、同時

に、社会や国家にとっては重荷からの解放を意味するという事態が存在することには疑う余地はない。価値に溢れ、生きようとする強い意志や大いなる力に満たされている生命をわれわれはどんなに失ってきたことか。それに比し、生きるに値しない生命を長びかせ、自然がなんら憐みをかけることなくゆつくりと存在の最後の可能性を奪いとるまで支え続けるとは、われわれは労働力や忍耐や財産の浪費をいかに無駄遣いしていることか。

ビンディングにとって、生きるに値しない生命の抹殺を許す最大の理由は、その生命の者には、生存意思や希死意識が欠如しているからであるとする。

ホッヘもまた、「医師による見解」において、ビンディングの治療不可能な知的障害者からなる第2グループに属する者の生命を存続させることは社会にとっても、その担い手である本人自身にとっても、いかなる価値もないという。なぜならば、彼らは、「精神的な死」の状態にあるからである。彼のいう「精神的な死」とは、外観的には、異様な身体的特徴、あらゆる生産的な能力の欠如、第三者による扶助を必要とする完全な無力状態で、内面的には、脳の器質的な損傷のために明晰な観念や感情、意志の動きが生じないこと、意識の中で世界像を呼び起こす可能性がないこと、環境世界に感情的にかかわることができないこと、自己意識が欠如し、主観的に生きたいと訴えることができないことが特徴である。

ホッヘもまた、ビンディングと同様のことを述べる。重度知的障害者の養護、介護のために、国は、非生産的な目的のために、国民財産から莫大な金額を費やしていることを数字で列挙して、国家全体の利益に比べれば、個々人には存在意義はないという意識、無駄な仕事を放棄して利用できるすべての力を結集すべきだという義務感、困難で心の痛みをとまなう事業への参加こそが人のとるべき最も責任ある行動にほかならない。そのためには、精神的に死せるもの者への同情は間違いであるとする。

『生きるに値しない生命の抹殺論』においては、ホッヘは、ヴァイマル共和国における財政上の危機的状況の解決のために、「精神的死」という概念を持ち出して、安楽死という名目での知的障害者の生命の抹殺を強く勧めることになる。つまり、ホッヘの思想には、まず国家の危機的状況があり、その解決のために、「精神的死」という理由づけで、知的障害者の抹殺を正当化するというのがその根幹にあった。そこには、精神科医としての知的障害

者を含めた精神障害者への理解、共感がまったく欠けていた。ここにもまた、精神科医というよりは、ナショナリスト・愛国者である立場からの思想が優先されることになる。

まさに、この観点において、1918年の講話「死ぬということ」におけるホッヘの死生観は、1920年の『生きるに値しない生命の抹殺論』に連続しているといつてよい。

7. 愛国者としてのホッヘの死生観

ホッヘが、戦時講話「死ぬということ」で主として論じたかったことは、死に際して大事なことは、死の意味を理解することである。若者たちが戦地で死ぬことを嘆いてはならない。たとえ生の期間が短くても、正しく生きてきた生はそれ自体価値を有していると思うことが死を理解することでもあるということであった。

大戦における戦死、スペイン・インフルエンザによる病死が、フライブルク市内で充満しているときに、一般市民に対して、死を怖れるなというよびかけはそれなりに了解できるが、しかし、講話の全体の流れからみると、ホッヘの主張は、大戦におけるドイツの勝利に向けて徹底抗戦をしよう、若者たちは死を怖れずに戦地に赴いてほしいという、ナショナリスト・愛国者としての戦意昂揚のようにみえる。少なくとも、精神科医としての、大学教授としての立場からの講話ではなく、ドイツ祖国党の幹部としての、死ぬことは「お国のために」という訴えが根底にあるような講話であった。

個人の死生観は、人が置かれた時代、社会、状況によって、種々変わるものである。第一次世界大戦末期に「死ぬこと」と題された戦時講話の中で表明されたホッヘの死生観が、彼の一生において、若年時より老年期に至るまで、一貫して同じ内容で保持されていたとは考えにくい。おそらく、子息を失うという事実を含めた戦時体験、長引く膠着状態による戦争観、ドイツの勝利を願つての徹底抗戦、反平和主義という愛国者、ナショナリストとしての理念が、第一次世界大戦に対して抱くホッヘの思いや感情を支配し、それによって、その時期の彼の死生観を形成していったとみるのが自然であろう。

しかし、ホッヘがそのような死生観を抱いたこと自体には、個々人の問題

でもあり、批判することはできない。また、講話のなかで、お国のためなら死を怖れずに戦地へと戦意を昂揚させたとしても、終戦数日前の講話でもあり、実効性は何もなかったに違いない。ただ、非常に悲劇的となったことは、その講話の背景となった愛国者・ナショナリストとしての理念、そしてそれに基づく死生観が、戦後にも残存し、1920年の悪名高い著作『生きるに値しない生命の抹殺論』に継続され、その15～20年後のヒトラーによる、安楽死という名のもとに知的障害者、精神障害者を抹殺するという施策の源泉となったことである。ホッへの個人的な死生観の基底にはあまりにも一方的な愛国者・ナショナリストとしての姿勢が存在したために、そのことが20～30万人の精神障害者を死に至らしめたことの一因になったことは、後世の精神科医としては、ホッへの死生観を批判するだけでなく、自らに課せられた問題として、厳しく自覚しておく必要がある。

参考文献

- Berghahn, V. 2009: *Der Erste Weltkrieg*, München, CH Beck (フォルカー・ベルクハー
ン 2014 : 『第一次世界大戦 1914–1918』 鍋谷郁太郎 (訳)、東海大学出版部)
- Binding, K and Hoche, A. 1920: *Die Freigabe der Vernichtung Lebensunwerten Le-
bens. Ihr Mass und Ihre Form*. Berlin, Berliner Wissenschafts Verlag (邦訳 : 森
下直貴／佐野誠 2001)
- Chickering, R. 2007: *The Great War and Urban Life in Germany*. Freiburg, 1914–
1918. Cambridge, Cambridge Univ. Press
- Degkwitz, R. 1987: *Chronik der psychiatrischen Universitätsklinik Freiburg i.Br.
1886–1986*. Neuss, Janssen
- Hoche, A. 1919: *Vom Sterben*, Kriegsvortrag gehalten in der Universität am 6.No-
vember 1918. Jena, Gustav Fischer
- Seidel, W. M. 1999: *Alfred Erich Hoche. Lebensgeschichte im Spannungsfeld von
Psychiatrie, Strafrecht und Literatur*. München, Verlag der Bayerischen Akade-
mie der Wissenschaften
- Seidler, E. 1991: *Die Medizinische Fakultät der Albert-Ludwigs-Universität Freiburg
im Breisgau*. Berlin, Springer
- 速水融 2006 : 『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ—人類とウイルスの第一次世
界大戦』 藤原書店。
- マイネッケ、F. 1974 : 『ドイツの悲劇—考察と回想』 矢田俊隆 (訳)、中公文庫、中央
公論社 (Meinecke F.: *Die Deutsche Katastrophe*, 1946)。
- 松下正明 2012 : 「アウシュビッツの後で Well-being を論じるのは野蛮である」『生存
科学』 23A: 11–36。
- 松下正明 2017 : 「1912年5月30日、キールにて—Hocheの症状群学説提唱の経緯」『精
神医学史研究』 21 : 78–84。
- 松下正明 2019 : 「戦時講話『死ぬということ』」 第23回日本精神医学史学会 (岡山市)。
- 松下正明 2020 : 「アルフレート・エリック・ホッヘー「死ぬということ」から「生き
るに値しない生命抹殺論」」『精神医学史研究』 21: 155–163。
- 森下直貴／佐野誠 2001 : 『「生きるに値しない命」とは誰のことか—ナチス安楽死思想
の原典を読む』 窓社。
- 山田義顕 1986 : 「ドイツ祖国党 1917–1918」『大阪府立大学人文学論集』 4: 17–30。

Wartime Lecture “On the Dying”: A. E. Hoche’s View of Life and Death in the Great War

by Masaaki MATSUSHITA

Alfred Erich Hoche (1865–1943) was a professor of psychiatry of the University of Freiburg and a chairman of the German Fatherland Party in the district of Baden. As a conservative nationalist, he delivered the wartime lecture “On the Dying and Death” to the general population at the University of Freiburg on the 6th of November in 1918. This was amidst the Great War and the pandemic of the Spanish Flu. This lecture included some themes such as various experiences in the course of dying, an understanding of dying and death, and the fear of dying and death. He emphasized the idea that one need not be afraid of dying and death if one would live with the thought of overcoming suffering and then hoping to go on to a peaceful world after death.

In this article, the author explains how this lecture seemed to inspire young men to start to the front of the war without fear of death. Roger Chickering (2007) mentioned that this lecture sounded like a nationalist’s political testament. Furthermore, this wartime lecture by Hoche was chronologically and thematically closely related to the book *Die Freigabe der Vernichtung lebensunwerten Lebens* (English title: *Allowing the Extermination of Life that is Unworthy: Its Measure and Form*) written by Karl Binding and Hoche (1920), which was thought to coincide with the beginning of the euthanasia of mental patients in the Third Reich. In sum, Hoche’s view of life and death might have been taken as the lead for Hitler’s program of the euthanasia.